飼育レポート

人畜共通感染症について

飼育展示担当（獣医）　三　浦　匡　哉

▲ 動物たちと遊んだら…

▲ きちんと手を洗おうね！

人畜共通感染症というのは、『ヒトから動物へ』または『動物からヒトへ』と病原体が感染すること、あるいはその感染によって起こる病気のことをいいます。感染源が動物であることから『動物由来感染症』と呼ばれることもあります。感染する病原体となる微生物や寄生虫は多種多様であり、WHO（世界保健機構）で確認されているだけでも150種類以上あるといわれています。

輸送形態の発達などにより、遠い外国だけの病気と思われたものが、私たちのすぐ身近なところで起きています。狂牛病、オウム病、SARS、鳥インフルエンザなどここ２～３年の間の出来事ですが、これらの病気を防ぐ取り組みは既に行われています。狂牛病にかかった牛肉が市場に出回らないように食肉検査所で厳重な検査が行われていますし、外国からむやみに動物が入ってこないよう、空港等の検疫所でも厳しい審査が行われています。

動物園にはいろいろな動物がいますが、ただ、見るだけで病気がうつるということは絶対ありません。仮にどんな動物を触ったとしても、石けんを使った手洗いやうがいなど当たり前のことをするだけで病気を予防できます。また、動物園では飼育担当者が毎日動物の健康状態を観察し、異常があればその都度獣医が診察や検査をしたり、展示場や動物の寝室を衛生的に保つなど病気を出さないように努力しています。

日常生活においても同様で、ただ病気の怖さだけが一人歩きしている感がありますが、正確な情報に基づいて生活すれば何も恐れることはありません。ペットを飼っている人なら、常に清潔な状態を保ったり、動物がいつもと違う様子であれば掛かり付けの動物病院や獣医師に相談すれば問題ありません。病気を恐れるあまりにペットを捨てるなどは論外です。捨てるという行為は病気の解決にはなりません。逆に、事態の悪化や『動物の愛護及び管理に関する法律』に触れて大問題になる場合もあるのです。

『むやみに恐れるな！しかし、決してあなどるな！』という姿勢が強く求められています。